

犬世ま咬

角川小説新書

咬ませ犬

昭和三十一年七月三十一日初版発行
昭和三十一年十二月二十日四版発行

定価百十円

著作者 戸川幸夫

発行者 角川源義

印刷者 中内佐光

東京都千代田区飯田町一ノ二

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番
電話九段(調)〇二二(代表)一五

(番丁・乱丁本は買取せず)

Printed in Japan

曉印刷・宮田製本

犬せま咬

夫幸三 巨



角川小説新書

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

咬ませ犬

五

忠犬像紳士録

五

仔犬

一〇

山犬塚

三

猪犬物語

一五

あとがき

一八

咬ませ犬

一

叩きつけるように飛びこんできた坤竜をガツと受けて立ち上った瞬間、牙と牙とが要と火花を散らし、ずうんと脳髓の奥の奥までが痺れたのを羽黒は感じた。

火花と見たのは砕け散った牙のかけらだった。それは三尺五寸の柵を飛越して土俵下のタイム係の机の上で金属的な音を立てた。根もとから折れた犬歯であった。

だが羽黒にはそれに拘泥^{こだわ}っている暇はなかった。敵の牙が、彼の前肢がマットを踏ん張った時にもうそのだぶだぶの、咬み傷で厚ぼったくなっている咽喉^{のど}の皮をぐいぐいと絞めつけてきたからだ。羽黒は咽喉を許した代りに敵の急所である耳を取った。続いて敵の肩に右脚を廻し、その巨大な体重を利用して相手を押し倒そうと突き進んだ。

柵が鳴った。柵と羽黒の間に押し潰された坤竜は自ら転ることによって、さらに一層強く羽黒の咽喉を絞め上げた。苦し気な、ひゅうひゅうという笛のような音が羽黒の鼻口から洩れた。

咬んでも、咬んでも、羽黒は自分の咬みに力が籠らないのを感じた。こんな筈ではない。彼は自己のペースが乱されたのを知った。牙の喪失は自信の喪失でもあった。羽黒は焦った。焦れば焦るほど相手は自信をもって着実に喰い下ってきた。

羽黒は苦戦した。たしかにこんな筈ではなかった。六歳の今日まで三十数回を戦い、その殆んどに勝利を占めてきた羽黒には戦闘は喜びでこそあれ、決して苦しみではなかった筈だった。こんども勝つ——そういった自信の下に始めた闘いであったが、敵の小兵ではあるが、それなりに身の交しの早い戦闘ぶりにはいささか慌てさせられた。しかも、その狼狽を倍加させたものは主戦武器の欠損だった。いくら咬んでも打撃を与え得ない、ということは牙の欠損自体よりも、彼の戦闘意欲と自信に罅を入れた。

羽黒は坤竜の喰い下った咽喉を振り放すために立ち上り、相手の体をマットに叩きつけ、引き摺り、悪戦苦闘の末、ようやく突き放したが、次の瞬間、闘争心の旺盛な坤竜は突放されるのと同じ速度で潜ってきた。羽黒は敵が後腿を狙ってくるのを防ぐ為に腰を落した。すると坤竜は羽黒の後腿を突くと見せて前肢を咬み裂いた。

羽黒は坤竜の耳を取った。が、それは弱々しい防禦だった。

戦いの前半に於ては羽黒の闘争ぶりには良いところは全く見られなかった。

だが、土佐犬の闘技規則では数多く咬まれることも、倒れることも——それ自体では負けと

はならない。闘志を失って逃るか、唸るか、牙を剥き出すか、吠えるか——それは怯を示すものと断定される——、参ったの印として悲鳴を挙げるかしなければ負けにならない。「寝込み」とか「押込み」とかいうのも、定められた時間その状態が続かねば負けにはならない。咬まれても咬まれても闘志の弱らない、意志の強い犬は闘犬界では「良い犬」といわれる。咬みが荒くて攻撃力が強く、敵を完膚なきまでにやっつける犬は「強い犬」と呼ばれる。そして「良い犬」と「強い犬」の両面を兼ね備えているのが「名犬」といわれる。

羽黒はその名犬の流れを汲んでいた。土佐闘犬の本場である土佐で、横綱を張っている名犬迅雷号の直系仔として東京に貰われてきた彼は、順調な歩みを見せ、満二歳半の初陣以来六歳の今日まで二か年半に積み重ねた戦歴で関東地区の横綱を張っていた。

闘犬界の事情は複雑で各地に愛好会や同好会が簇出し、各自勝手に横綱犬や大関犬を作り上げていた。その弊を改めるため地区連合会が出来、またこれを全国的に統一しようという気運が高まり、昭和七年土佐犬普及会の手で全国大会が催されて、初の全国横綱犬の決定を見たのであった。一口にいうならば全国横綱は東京相撲の横綱というのと同様で、全国どこでも通用する公認の横綱であるが、地区横綱はその地区だけで通ずる、いわば草相撲の横綱というところであった。羽黒は全国横綱とまではゆかなかったが、彼の親父の迅雷は第×代全国横綱の榮譽を勝得ていた。

土佐犬の世界では血統が尊ばれる。良い血統の——つまり父も母も強い犬の血をひいた——直系仔は、良い戦闘ソウを示すからだ。

迅雷の仔の羽黒は——呼び名をテツといった——昭和八年に土佐で生れた。生れ落ちるとすぐに土佐犬の愛好者である東京の鉄工所の主人岡本に、当時としては法外な二百円という高値で買い取られ、闘犬師トウケンの伝次のつきっきりの世話で闘犬界にのしつたのであった。

闘犬師の伝次は、この日の東北地方Y市における地区闘犬大会にも岡本に従って来ていた。彼は羽黒を扱うために土俵の柵さくに上っていたが、タイム係が、

「タイム、十二分……」

と時間の経過を知らせた時、土俵下の犬主席にいる岡本の顔を振り返ってちらと見た。

その眼は、

「旦那、牙をやられたから今日は悪くするとやられますよ。適当な時に痛み分けにしてみようか」

と伺いを立てていた。が、強気の岡本はかぶりを振って、

「最後までやらしてみろ」

と眼で合図した。

羽黒はたしかに今日ほど苦しく戦ったことはなかった。主戦武器を失った不利は時間かが経て

ば経つほど、顕著けんちやくになってきた。

だが、彼には不屈の魂があった。不幸にして全国横綱を獲得する機会は逸していたが、彼の体内には全国横綱に据えても決して恥しくない誇りと闘争精神が沸々うわうわと煮えたぎっていた。だから戦っているうちに彼は日頃の平静を取り戻していた。

敵の坤竜も青森地区で大関を張っている犬であった。だから彼らはお互に勝負は最後は肉体的でなく、精神的に決することを知っていた。

戦は後半戦に入り、二頭の犬は死力をつくして戦った。彼らの肉体から弾はじき出た血が自己や相手の上半身を真っ赤に染めた。

二頭の犬は立上り、潜り、咬み、振り、転がり、飛び、跳ねた。もう牙の無いということは羽黒には問題でなくなった。牙の代りに彼には敵に優る体力まさがあった。坤竜には体力がない代りに敵に欠けたものが残っていた。体力の劣る彼は常に羽黒の下に潜っては咽喉のどや後腿マシムシや蹠ムシを狙った。老巧な羽黒は耳を咬み、肩に自己の重みをかけ、前肢を引いて良く防いだ。それは一見防禦ぼうぎやうに見えたが、小柄な敵の体力を消耗させる絶大なる攻撃でもあった。

二十分が過ぎた。ようやく疲労の差が現われはじめた。坤竜は押しまくられて、何度もマツトに薙なぎ倒された。そして遂に立てなくなった。荒い呼吸で、横たわった彼の身体が波のようにゆれた。

羽黒はさすがに歴戦の雄だった。彼は倒れた敵をいたずらに攻撃するような愚をしなかった。彼もまた坤竜の傍で荒い呼吸を続けながら油断なく敵を見張った

倒れた犬を無茶苦茶に咬むのは、若い未経験な犬のすることなのだ。上になって倒れている犬を咬みまくっているのは勝ち誇っているように見えているが、その実不安がつきまとうているのだった。敵が悲鳴を挙げればよい。が、もし相手が我慢強い「良い犬」でびくともしなかったら、咬んでいる犬はだんだんと不安が募^つってくる。そしてその不安はやがて恐怖^{きょうふ}に変わり、ついには逆毛を立てて逃げ出す羽目になるのだ。そこに精神的な勝敗の分れ目があった。

地区にしろ、横綱や大関を張るような犬は「名犬」でないまでも「強い犬」か或は「良い犬」である。

寝込んで咬まれたからといって哀れな悲鳴を挙げる筈^{はず}はなかった。だから羽黒は寝込んだ坤竜の傍に立って平然と注視していた。肉体的には休止していても彼の攻撃精神は下から跳ね上ってくる敵の攻撃精神をぐっと押えつけていた。

「寝込み、五分……」

と主審が合図した。

一分……二分……三分……四分……五分、遂に坤竜は立たなかった。そして怒濤^{どたう}のような拍手がこの破損した老雄^{ろうゆう}を押し包んだ。

ところでこの物語りはここからスタートするのである。

羽黒の敢闘ぶりが、まだ昂奮も冷めやらずに引揚げてゆく観衆の口々に讃えられている時、その舞台裏では早くも羽黒号譲渡の話が進められていた。

この大会の興業主であり、Y市闘犬界を牛耳ろうという野心を抱いていた高梨興行社長の高梨喜平はY市に良い闘犬の居ないところから羽黒を譲り受けて一儲けしようと企んだ。

高梨から申込みを受けると岡本は、攻撃力の落ちた羽黒の今日の闘争ぶりを見て、もうその時が来たことを悟った。

その時とは――

闘犬の一生は短い。それは長かるべき生命の灯を酷しい鍛錬とあの感激的な一瞬に烈しく燃焼させるからであった。大体、二歳半で闘争生活に入る大型闘犬は四、五歳で全盛の峠を越すと急激に老い込んできて八九歳で死の爪に捕われるのであった。例外的に十二、三歳まで生き延るものはあってもそれは単に生きているというに過ぎない。だから岡本鉄工所の主はその時――

峠を越えた時――が来たと思った。それで彼は伝次に相談した。

「いいでしょう。いまが売り時ですよ。勝ったんだし……。歯っ欠けになっちゃあ、もういくらも闘えませんか。それに仔も取れてることですし……」

と伝次は言った。

羽黒の全盛期に高額な交配料でうんと稼いでるし、またその直系仔の優秀な奴を嗣目として手許で育てていることが、彼らに羽黒を値によっては手放してもいいという気にさせた。

土佐犬愛好者と称する者の中には大体三通りの型がある。その一つは真に心から、犬を愛する者で最後まで犬を見捨てない人々である。次に単に勝負だけに興味をもっていて阿克セサリ―としてその犬が強い間だけ飼う人である。最後は儲ける為に飼う人であった。

「Y市の闘犬界発展の為にしたら手放し難い愛犬ですが……」

と東京の阿克セサリ―屋は美辞で挨拶し、

「今後、わがY市の闘犬界の将来は羽黒の直系仔で埋まりますべ。貴方のご好意には感謝の他はないすや」

とY市の儲け屋さんが麗句で答えた。

こうして羽黒は愛犬としてでなく、一個の物品としてお互の利益のために、お互いが折合い、満足出来る値段で取引きされ、輸送犬箱ともコミで、東京を出発する時は考えてもみなかった運命に左右されてY市に留め置かれたのであった。

それは昭和十三年の頃の闘犬界では珍らしいことではなかったのだが――。

二

高梨興行主は大枚八百円——今日にすれば二、三十万円くらいであろうか——を投じて買収求めただけに抜け目のない商売人として一刻も早く元金を取り戻したかった。

幸にして——それは高梨興行主にとってだが——Y市はもちろん、県下でもこれ程の闘犬は居なかったので、欲の皮の突っ張った彼は種牡たねおとして羽黒を大いに宣伝した。

羽黒はその意味ではたしかに二人の飼主が約束した通り、Y地区の闘犬界のために活躍した。だが、土佐犬の場合は秋田犬やスピッツやブーデルなどと違って系統や形態美は二義的なものであった。

「強い」ということが第一の条件である土佐闘犬は、やはり実地に闘って見せ、皆を納得させる必要があった。そして過去の戦歴よりもやはりあのきびきびとした生の戦いぶりを、皆の前に提供しなければ十分に客は呼べないのであった。

そこで高梨はお手盛りで闘犬大会を何べんか開催かいさいした。

老いたりとはいえ関東地区の横綱犬であった羽黒に敵する犬がこの地区にあらう筈がなかった。だから羽黒は専門的な十分満足すべき曳綱運動ひきうながなされず、しかも試合の直前まで申込みさえあれば交配こうはいさせられるという出たらめな悪条件にも拘かかわらず、彼は気楽に闘いまた気楽に

勝ち続けた。

酷しい修行の道を歩まねばならぬ闘犬にとってはこれは正に墮落だらくの道であった。

そしてそれが立証される日が来た。

お手盛りの闘犬大会に飽き飽きしていたファンたちに最初の公認全国大会が隣りの市で催されたのである。

高梨興行主はこの機会に自分の持ち犬の価値を一層大きく宣伝しようと考えた。

彼は完成され、鍛錬たんれんされて、見事な闘争ぶりを示す犬そのものに憧れあこがれを持ってはいたが、犬をそういう状態に導く方法を知らなかった。また知ろうとする努力もなかった。

闘犬というものが、戦いの場に出るためには如何に早くから節制せつせいし、鍛錬されねばならないかを彼は知らなかった。彼は全国大会の出場犬を、彼がいつもお手盛りの闘犬大会で見かける駄犬たちと同様に見た。

だから彼は羽黒の曳綱運動ひきづなも若い者にまかせっきりだった。

闘犬は試合に持ち込むためには一月ひとつきにわたって規則正しい「平均運動」なり「山形運動」を行わねばならない。こういった十分な運動のついた犬にしてはじめて、腹が切れ上り、四肢や体軀たいくに鋼鉄こうてつの強靱きうきさとはねの様な弾力性が出てきて、あのきびきびした戦闘ぶりを示すのだった。羽黒は無智な連中のいい加減な取り扱いの下に、十分の運動も、細心の注意も与えられず

にぶつつけに大会に持ち出された。

運動不足のために彼の筋肉は弛み、その上を脂肪が厚く乗っていた。しかも闘犬について全く知識のない彼の妻が、試合出場と決まると勝たせたい一心から、やれ肉よ、卵よ、牛乳よとご馳走ぜめに責めたてたから、羽黒はいやが上にもぶくぶくに肥え太って曳き運動さえも大儀（たいぎ）そうであつた。

高梨夫妻は試合前日、会場に運ばれている犬箱を一つ一つ覗き込んでどの犬も切れ込みよく腹が上り、肋骨（ろうこつ）が算（かぞ）えられそうに肉が落ちてゐるのを見て、

「みんな栄養不良だ、これなら勝てるすや」

とほくそ笑んだ。彼らには鍛えられた犬と瘦（や）せた犬との区別がつかなかったのである。

だから彼らはその日の午後の組み合せ会議で、番組編成委員が羽黒の年齢と牙の欠けたことを考慮に入れて秋田から来た若犬と組ませようとすると不服を唱え、

「羽黒は関東地区の横綱犬だや。そんな若犬と……」

と言い張った。

「あれは嫌だ」とか「これとは貫祿（かんろく）が違う」と文句ばかりを並べ立てるので、いささかムツとした係員が、

「それなら青森の小天竜ならどうだな」